

関係代名詞の指導

丹下省吾・加藤 剛・高橋恵亮・倉田有邦

中学校の第3学年で始めて出てくる種々の語法の中で、関係詞はその重要さからいってもまた教授上の困難さからいっても、最も注目されるべきものであらうと思われる。関係詞を知るか否かで、英語の能力は格段の差を生ずるわけであり、中学英語の最後の山であると同時に比較的高度の英文の理解への第一歩たともいえるわけである。

そこでこのように重要な関係詞を教える上でわれわれが非常な困難を感じるのはなぜであらうか。一口にいってしまえば、関係詞を習い始める以前の基礎知識が不十分だからということにならう。中学1, 2学年において、当然マスターしている筈の文の根本構造が分っていない者が実際にはかなり大勢いるわけで、いわば玉石混じりの能力差をもつ生徒に教えねばならぬことはたしかに教師にとって負担である。関係詞を習う以前にさえ、生徒の語学能力は相当に開いてしまっているのである。

関係詞を理解するための前提として、Simple Sentence における文構造（文法的知識としてではなく習慣的に身についたものとしての）が身につけていることが必須条件である。更にそれに附随して人称代名詞の格変化、修飾語句と主要素との判別がほぼ自動的に分らねばならない。しかし実際はこれらの知識が決して十分でないことは誰しも認めなくてはならないであらう。

そのような困難な条件を背負いながらも、ともかく関係詞を教えなければならない以上、基礎となる事項を反覆し固めながら導入を進めてゆくことが肝要であらう。この際、関係詞の説明に必ずといっていいくらい用いられる二箇の Simple Sentence を連結する過程に於いて、説明をなるべく簡単にすませ、もっぱら

Oral Drill に重点を置いて、生徒の直観にうったえるのがよいと思われる。使用する文はなるべく簡単なものを用いることとし、先行詞と関係詞節との関係を単純な形で会得させる。

関係詞の最も根本的な原理——そしてこれは生徒にとってまことに理解し難いことでもあるが——は先行詞を後ろから修飾するという事、及びそれ自体が

Clause の主語、目的語、その他のものになっているということである。これだけのことをいちいち説明しては大変であり、いくら骨折って原理を解説しても明確に分らせることはまず不可能であらう。そこで説明を省いて Oral による反覆練習に重点を置くわけである。実際にやってみると、先行詞を後ろから Clause が修飾する構造はこの Oral 作業で相当に効果的に理解されるようである。導入の段階での最初のねらいは実にこの先行詞と関係詞節の修飾関係を理解させることにあるわけであるから、この場合、種々の格変化を出してこることは混乱を防ぐ意味で差し控えた方がよいと思われる。もっともこの点については現行の教科書にも、相当に細心の配慮がなされているようである。一定の格に限っての一定の関係詞によるこの drill が一応終ると次の段階として先行詞による変化(人間、物体との違い)、あるいは格の変化があらわれてくる。特に格の変化は関係詞の Clause 内に於いての役割を分らせなければならないので相当に困難である。これにはやはり二箇の Simple Sentence に分解した形との比較をさせながら、結合や分解の作業をくり返して覚えさせるほかに適当な方法はなさそうである。特に Simple Sentence の形に於いてすら、格の使い方を知らぬ者——これは同時に文構造そのものが分っていない場合が多い——もいることであるから、Simple Sentence 及びそれらを結合した Complex Sentence を何度も言わせることが大切であると思われる。なお、格変化を教えるに当り、抵抗を少なくするために最初は主格と目的格に“that”だけを用いる方法もあると聞く。本校ではまだその方法はとっていないが、注目に値する方法である。今後の課題としたい。

最初にとり上げる関係代名詞には主格をあてるのがまず適当である。Clause の語順が独立文のままであり、最も導入し易いからである。続いて目的格、所有格、前置詞付きのもの、という順番がよいと思われる。主格の関係代名詞をしっかり練習しておけば、後のものはさほど説明に苦勞を要さない。これは即ち関係詞というものの概念をつかんでいるからであり、この意

味で最初の練習は相当に時間をかけて徹底させる必要がある。

目的格の関係代名詞は例文を挙げるには事欠かないが、注意すべきことは、格を重視する余り、Contact Clause の取り扱いが軽視される傾向がありはしないかということである。現実で使用される英文においては、目的格の関係代名詞は Contact Clause の使用のために、余り姿をあらわさないということが言える。無論、初期の段階では目的格の使用法も習熟させるべきであるが、少し進んだら、Contact Clause もどしどし出して練習させる必要がある。この際、生徒には関係詞の省略として教えることは差しつかえなからう。

所有格の関係詞はちょっと厄介である。主格、目的格のものとは異なり、日本語にあてはめにくく、次の名詞との結びつきがよく分らないからであるが、分解と結合の作業をくり返し、更に例文を暗誦させ、口調によって覚え込ませることが肝心である。例文には紋切型のものが多いが、生徒の興味を惹くためにも、絶えず Variety に富んだものを用意しておきたい。whose の形を主として教えておいて、of which の形はずつと後になってからにした方がよいであろう。

前置詞付きの形は、所有格と同じ要領で教えるのがよいと思われる。最初に前置詞+関係代名詞の形のものを扱い、前置詞を後へもってゆくのはあとから教えるようにする。なお、関係副詞との連関も考慮に入れておくべきである。

what の使い方を分らせるのはさほど困難ではないが、接続詞 that の用法と混同するものがかかなりあるから、contrast によって、両者の機能上の区別をはっきりさせておくべきである。因みに接続詞 that は第2学年に出てきている。

先行詞が特殊な場合の関係代名詞 that の用法は先行詞との関係つけて覚えるため、不注意による以外は、誤りは割合に少ない。

非制限用法の使い方は、元来が文語的な表現であり、production よりも recognition の段階にとどめておいてよいものが多いと思われる。それに、この用法は制限用法の知識が十分に生徒に理解された後で、教えることが必要であろう。

以上で指導上留意すべき点を、関係代名詞の種類別に眺めてみたわけであるが、ここにもう一つ挙げておかねばならぬことに、Clause の位置の問題がある。関係詞の Clause が主文の文尾についている場合と、文中についている場合を比較すると、後者の方がはるかに理解困難であり、Clause がはまり込んだ形になっているのを見抜けない者が相当に多い。まして、この形を使つての英文が書ける者は甚だ少数であつて、余程能力の進んだ生徒でないとき正答は望めない。従つてこの形、特に主語に Clause がついた形は相当重点的にとり上げて練習させる必要があると思う。案外盲点になり易いと思われるからである。

なお、関係詞を指導するに当つては、生徒の注意をそこに向けるためとかく関係詞を強く発音しがちなものであるが、(そしてこれは格の説明の場合にはある程度止むを得ないことでもあるが) 実際に使用される場合のことを考えれば、適切とはいえず、むしろ pause と intonation に注意して練習させるべきであると考えられる。

以上は、われわれの乏しい経験に基いて、関係代名詞の教授上で気附いた点を思いつくままに羅列してみたものであるが、われわれも、かくあるべしと自信をもって言えるような満足のゆく授業を行い得たことはほとんど無きに等しく、ましてこれまでに述べてきたさまざまな留意点などに十分な配慮をもって授業を行つてきたものでも無論ない。これらはむしろわれわれの失敗したことに対する反省として自戒であるが、毎年3年生に教える関係詞の指導に当り、些かでも共感を覚えていただければ幸甚である。